

資料室だより 163

日本のカトリック教会聖歌に関して基礎的な学問的な研究をめざす良書が最近2冊刊行されましたのでここにご紹介します。

**+時津ハインツ・大津磨由美共著：日本カトリック教会の音楽—明治期から昭和初期まで
宣教師らの軌跡とともに—**

日本基督教団出版局

+松橋輝子：日本の教会に響く歌—カトリック会衆歌の系譜と意義

桜美林大学叢書 論創社

ラテン語のグレゴリオ聖歌ではなく日本語で歌うための聖歌の歴史は日本における洋楽受容史の脈絡のなかで研究対象となってきました。上記の2冊はそれに加えて宣教師たちの活動と日本の信徒たちとの交わり、また松橋著書は一般信徒からの声も収録されたドキュメントも含みます。同書からフランシスコ会フルダ管区のノル師の言葉を引用します。1930年代の言葉です。

「大衆が心からその邦語民衆唱歌を歌ふことによって恐らく彼等は一層強くその祝日の気分を味ふことが出来る。この意味で我々は絶えず一般的聖歌運動を奨励するばかりでなく特に邦語民衆唱歌の使用を益々励ましたい」

ラテン語の典礼をそのまま持ち込んだゆえに宣教活動が思うように推進できないと感じた彼らの地道な努力が伺えるのですが、第二ヴァチカン公会議で聖歌の日本語化が許されるずっと前の、インカルチュレーションの軌跡です。第二ヴァチカン公会議を受けて日本語化された現行の典礼聖歌とは違いキリスト教音楽の長く深い伝統を生かしながら日本文化と融和し民衆化しようとしています。

例えば当資料室も所蔵する1918年版の「公教會聖歌集」は1曲目に待降節の有名なイムヌス Conditor alme siderum が数字譜で記載され、数字の下に日本語で歌うべく「歡喜（喜び）の源泉（もと）よ、疾く降りたまへ、野も山も海も仰ぎてぞ待てる」

という美しい日本語が付されています。カトリック教会にも会衆用聖歌集への熱い要望と努力がありました。今、カトリック聖歌集を積極的に使う教会は少ないかもしれせん。しかし教会暦の季節感を多少なりとも残しているカトリック聖歌集は排除されるべきものではないと思います。

松橋著書のなかに挙げられる明治期の聖歌集は当資料室にも所蔵しておりますし、以前の資料室だより147にもご紹介しました「明治期 讃美歌・聖歌集成」（手代木俊一監修）もありますので日本語讃美歌への模索の歴史を皆さんにも興味を持っていただきたいと思います。グレゴリオ聖歌はローマ・カトリック教会の中心軸として確立しておりますが、母国語で、俗語で歌いたいという欲求は中世ヨーロッパのキリスト教音楽の歴史のなかに脈々と存在します。それは福音宣教には歌が不可欠であり、わかる言葉で福音を伝えたいという情熱のあらわれです。

（杉本ゆり 記）